

登録コード	EKH03900	開講年度	2026				
授業科目	教育実践実地研究					担当教員	谷塚 光典 他
英文授業名	Field Study for Educational Practice 2					副担当	谷内 祐樹・伏木 久始
単位数	7	講義期間	通年(集中)	曜日・時限	集中・不定期	履修学年	2年生
講義室				授業形態	実習	備考	
信大コンピテンシー	非該当						
(1)【授業の達成目標】	【授業で得られる「学位授与の方針」】					【授業の達成目標】	
	26EAカリ, 25EAカリ, 24EAカリ						
	教育の専門職としての学識・技能					教職基盤形成コースの学生は、即戦力となる新任教員としての資質を身につけることができる。具体的には、子どもの理解に基づく授業計画力・授業指導力・授業分析力、他者と連携して指導を展開する協働的態度を身につけることができる。 高度教職開発コースの学生は、勤務校の課題解決に関与することを通して、スクールリーダーとしての資質を身につけることができる。具体的には、学校課題や組織の特徴を含めて実態を把握する視点、異なった考えに向き合い他者と対話を続ける協働的態度を身につけることができる。	
	教育現場の諸課題の背景にある関係構造に気づく視点					教職基盤形成コースの学生は、自らの課題に対して、「実態把握→目標設定・方針方法の決定→実践→評価」の一連の流れを繰り返して課題解決を試みることにより、実践的課題解決力を身につけることができる。 高度教職開発コースの学生は、自らの課題に対して、「実態把握→目標設定・方針方法の決定→実践→評価」の一連の流れを繰り返して課題解決を試みることにより、実践的課題解決力を身につけることができる。	
	社会の一員である教員として生きる意志と倫理観					教職基盤形成コースの学生は、自らの研究課題を実践的に探究するとともに、学級づくりや生徒指導、学校運営について実践的に学ぶことができる。 高度教職開発コースの学生は、自らの関心と勤務校の課題を基に明確化した研究課題を追及することができる。	
(2)授業の概要	本実習科目は、4月～12月にかけて、1回8時間の実習を35回行う（週1～2回×35週を目安とするが、教職基盤形成コースの学生は、週1回程度の公立校実習に加えて、附属校における2週間程度の連続した実習も含むよう設定する）。 実習生は、配属校で授業を行うとともに、学校行事、校内研究会や職員会議等にも参加する。これにより、授業と学校運営の双方の視点から自らの課題を追及する。さらには、子どもの理解に基づき授業を展開する指導、校内の多様な意見を踏まえながら学校が抱える課題の解決を図る協働的態度について、実践的に検討する。 なお、高度教職開発コースの学生は、拠点校に勤務しながら、「教育実践実地研究」を拠点校で行うため、通常の勤務と実習による課題解決を区別して活動できるよう、実習に位置づく実践については活動記録の作成により大学教員が時間と内容の管理を行う。この勤務と実習の整理と管理の方法については、具体的には以下のような方法で行うものとする。 〔具体的な手続き〕 ○学生は週毎に活動記録を作成する。 ○月毎に、記録に基づき大学院においてカンファレンスを実施する。 ○半期毎に実習報告を作成し、中間的な指導を実施する。 ○年間の取組の展開を報告書にまとめ、最終的な報告検討会を実施する。 担当教員が小学校・中学校での実務経験を活かして講義を行います。						
(3)授業計画	<教職基盤形成コース> 第1週～第5週 ○各活動を通して、自らの課題について「実態把握→目標設定・方針方法の決定→実践→評価」の一連の流れを繰り返して課題解決を試みる。 ○授業参観・授業実践を通して、子どもの実態・特徴を理解する力を養う。 第6週～第10週 ○各活動を通して、自らの課題について「実態把握→目標設定・方針方法の決定→実践→評価」の一連の流れを繰り返して課題解決を試みる。 ○授業参観・授業実践を通して、教材および指導法から授業を分析する力を養う。 第11週～第15週 ○各活動を通して、自らの課題について「実態把握→目標設定・方針方法の決定→実践→評価」の一連の流れを繰り返して課題解決を試みる。 ○前年度の課題に基づき授業研究のテーマを決定し授業計画案を立案することにより、授業をデザインする力を養う。 第16週～第30週 ○各活動を通して、自らの課題について「実態把握→目標設定・方針方法の決定→実践→評価」の一連の流れを繰り返して課題解決を試みる。 ○授業実践を通して教材開発力・授業指導力を養うとともに、T Tによる授業実践を通して他の教員と連携する力を養う。 第31週～第35週 ○各活動の成果を踏まえ、課題に対する提案をまとめる。 ○授業における自らの実践を振り返り、課題を検討することにより、省察する力を養う。 <高度教職開発コース> 第1週～第30週 ○各活動を通して、自らの課題および勤務校の課題について「実態把握→目標設定・方針方法の決定→実践→評価」の一連の流れを繰り返して課題解決を試みる。						

(3)授業計画	第31週～第35週 ○各活動の成果を踏まえ、課題に対する提案をまとめる。
(4)成績評価の方法	○フィールドポートフォリオの作成状況：100% ○得点率による評価基準は次のとおりとする。 90%以上 秀, 89-80% 優, 79-70% 良, 69-60% 可, 59%以下 不可。
(5)履修上の注意	○1年次に履修する「状況分析チーム演習」「授業・学級づくりチーム演習」において自らの課題を明確化しておくこと。 ○2年次に「個に応じた教育チーム演習」「学校・地域活性化チーム演習」および「実践研究とリフレクション」と並行して履修すること。 ○(公財)日本国際教育支援協会の学生教育研究災害傷害保険・同付帯賠償責任保険に加入すること。 ○履修に必要な経費(参加費・交通費・食費・文房具代・保険料等)は、学生の自己負担とする。
(6)質問,相談への対応および連絡先	○担当教員への質問・連絡方法は、各自担当教員と相談して決定すること。 なお、教育学部「開設授業科目一覧表・授業時間割表」記載の教員名簿を参照すること。
(7)成績評価の基準	に考察を加えている。その分析・考察が、学生自らの課題追究および拠点校の学校課題解決に大きく寄与している。 「かなり上である」：到達目標の のいずれかについて、多様なエビデンスに基づいて分析しており、多面的に考察を加えている。その分析・考察が、学生自らの課題追究および拠点校の学校課題解決に寄与している。 「やや上にある」：到達目標の について、多様なエビデンスに基づいて分析しており、考察を加えている。その分析・考察が、学生自らの課題追究または拠点校の学校課題解決に寄与している。 「水準にある」：到達目標の について、エビデンスに基づいて分析しており、考察を加えている。その分析・考察が、学生自らの課題追究または拠点校の学校課題解決にある程度寄与している。
(8)事前事後学習の内容について	○実習にあたっては、自らの課題と拠点校の学校課題を常に意識し、実習内容とどのように関連するかをまとめておくこと。 ○自らの課題と拠点校の学校課題に関連する文献や情報を収集しておくこと。
【教科書】	○特に指定しない。
【参考書】	○授業の中で適宜紹介する。